

園内研究をめぐって(その2)

——ビデオ観察を通じた共同研究について——

○岸井慶子(千葉明德短期大学)

松浦浩樹(青山学院幼稚園)

1. はじめに

本研究でとりあげるA幼稚園でのビデオ観察や園内研究会の諸状況については、(その1)に述べているここでは約3年間、25回の園内研究会(以後カンファレンスとする)の記録と、ビデオ記録、撮った時の撮り手自身の問題意識、疑問などを撮影直後に書き込んだあらおこしメモ、をもとに中心的に問題になったことと、そこで生じた関係性を探り、共同研究の意味を探ろうと考えている。

2. 問題となったことと参加者の関係性

月に一度、U男ら男児を中心とした朝からのビデオをもとに午後カンファレンスを行なう中で、何が問題とされ話合いの中心であったのかを概観してみる。そしてそこで、参加者それぞれはどのような立場をとり関係が生成されてきたのかを探ってみる。

(1) 幼児理解、発見や賞味

特に初期の頃(3年保育3歳時)は、保育者が見きれない幼児の行動や幼児の思いをとらえることが中心であった。他の幼児の対応で追われ、おおまかな行動の流れはつかんでいても、細かく追うことは物理的に不可能な状況で、一人の幼児や一か所の遊びを追い続けることが出来るビデオ観察のよさを発揮することが出来た。つまり、ビデオの中に映った幼児について細かく理解する、ということがカンファレンスの中心であった。同時に、担任以外の保育者(特に他の学級の担任)が、その幼児について知る機会となった。

これは、園内の保育者達が具体的な姿に即して意見を交わし合うという、言わば園内研究の素地作りという意味合いをもった。岸井にとっても、これから観察を続ける上での情報収集の意味合いをもっていた。

ここでの参加者の関係は、問題の指摘者—指摘される者という庄をもった関係ではなく、ビデオの中の子どもの行動のおかしさ、楽しさ、ひたむきさ、健気さ等々を共に発見し、味わう関係であったと見られる。どちらかという、ビデオに登場した幼児について日頃からの情報をもっている担任が優位に立ち、外部参加者や他の保育者達は「その子を深く理解していないのではないか」という負い目をもつような関係も時にみられた。

(2) - a - 特定の幼児への指導の在り方

一人でいることが多く、保育者のかかわりを求めているのではないかと考えられたK男。ビデオでとりあげられる以前に、日頃の保育の中で友達への関わり方を丁寧にみていく必要があると思われたY男他。これらの幼児について話合う時期があった。

K男に関しては、岸井が気にかかることからビデオのフレームが向けられ、以後、いわゆる気になる幼児として長く話題になっていた。Y男に関しては、保育者の問題意識が先行し、たまたまビデオに映っていた場面に問題が現れていたために話題の焦点になった。

この頃の話合いは特定の幼児についての共通理解に止まらず、どのように指導していったらよいかという問題を裏側に孕みつつ進行していった。岸井も含めて参加者は、自分の弱点を曝すことなく、担任の弱点(特定の幼児に指導すべきだというような)について話題にするという立場をとることになる。また、松浦はフレームが向いた場面に問題があるのではないかと、というような岸井の評価診断的な思惑を気にしながら被撮影者となっている。このことをマイナスに感じる岸井はなおのこと自分の評価や考えを表に出さずに撮影をするようになり、松浦はますます岸井のフレームの行方や診断を気にするようになっていく。カンファレンスでも、岸井は出来るだけ問題を一元化せず、問題の複雑さを強調したり、あいまいにしたり、先送りしようとしたりする。このことも又、松浦自身の撮られることへの「しんどさ」を増す結果となった。

また、問題を指摘する意図なく岸井が撮影した場面でも、日頃の保育上の問題を他の保育者が発見し、問題として浮上させることが出てくる。

ここでは、松浦から見た他の保育者や岸井は、自分の保育の問題点を指摘し診断し評価する存在として受け止められる。また、松浦が言語として自覚していなかった保育行為について問い、説明を求める存在として参加者やカンファレンスの場が位置付いている。この頃、松浦は「岸井の意図が見えずイライラする」「そんなことを聞かれても、説明出来ない。できれば言いたくない」「それ迄の保育経過を知らずに、何がわかるの」というような防衛、反発、を感じている。

(2) - b - その時々々の幼児の理解と指導の在り方

K男から始まり、その時々々のいろいろな幼児に対す

る保育者のかかわり方に踏み込んだ話し合いが続く。

ここで岸井はカンファレンスに臨む態度を変化させた。それは、それまで控えていた岸井自身の感想、問題意識などについてビデオを見ながら積極的に発言するようになったことである。評価者になりたくない、一部を見て全体を判断するようなことはしたくない、という岸井の思いとは裏腹に、次第に強者になっていく岸井。ビデオに映った保育が松浦の保育の全てである、と思わせてしまうようなビデオ映像。そのような関係に岸井自身が痛みを感じた。またビデオに映った保育の状況について松浦と話し合わずにはいられない問題意識を、保育を経験し子どもの傍らにいる者としての岸井が感じた時もあったからである。その様な岸井の開示的な態度は、松浦の「イライラ」や「何を問題としているのだろう」という「防衛的な探り」を減らし、新たな関係がつくられていったと言える。この関係は松浦と他の保育者の間でも作られ、ここに本当の意味でのカンファレンスが始まったのではないかと考える。このような関係が生じたのは岸井が開示的態度をとったからという単純なものではない。カンファレンスを始めてからの年月、途中で担任が替わったこと、他の保育者にも関係する場面が繰り返して話し合われてきたことなど、複雑な要因があると考えられる。

(3) 保育者自身の行動をそうさせた思い、意図の吐露

カンファレンスを始めて一年半後の記録によると、この頃からそれぞれの保育者の発言の前に「正直言って」「正直な所」という前置きが多くなっている。また「この時張りきったのは、前週の○曜日のような盛り上がり状態に早くもっていきかかったから。ビデオも回っているし・・・」「正直言って（援助を決断するのが怖い。自信がもてないので。その内に出来事が進んでいってしまう）」というような発言が聞かれるようになってきている。「正直言って」という前置きが出てきたからと言って「本音で語るようになってきた」とは言えない。しかし、少なくとも、もう少し自分の実感に踏み込んで意見を言ってみたいという気持ちがカンファレンス参加者の間に出てきたと言えるだろう。と同時に、出来事のなりゆきだけでなく、その出来事にかかわっている保育者自身の気持ちのありように目が向いてきていることが判る。

(4) 遊びへの援助の仕方、環境の構成

カンファレンスの話題が、ビデオを通しての観察と理解、その子の気持ちにどう応えたらよいかを探る、自分自身の気持ちや意図、などについて問題とされる他に、遊びへの援助の仕方についても話題になった。

遊びへの援助について考えるには、その時の幼児の発達理解や遊びそのもののもつ意味の理解、見通し、等を考えていくことになる。

ここでは、松浦と岸井が援助や教材の提示などをめぐって意見が対立したことがいくつかあった。それは5歳時のビリヤードごっこをめぐるもの、朝の環境構成や保育者の構えについて、Y男をめぐる活動の援助などの出来事である。対立に関しては互いに意見を出し合うが、どちらが良かったという結論は未だにでない。話し合うことで、保育行為の根拠となるものの違いが見えてきたように思える。ここでは、過ぎ去って再現不可能な保育について、違いを認めつつ松浦も岸井も同じ地平に立てたように思う。

(5) 園内の保育者が共通に抱いているイメージ

例えば、園庭の使い方。A幼稚園の保育者として最終の幼児の姿をどのように具体的に描けるか、ということ。また、暗黙のうちにもっている「このような保育」「このような遊びの姿」「場の使い方」「おおまかな育ちの姿」などである。互いに理解しあっているはずであるが、担当する保育者のカラーが強烈に出てその年度毎に違う育ちの姿をそれぞれの保育者が「自分の」保育に関して抱いていることについてである。「自分の」保育が「自分たちの」保育に向かって活発に論議された。ここでは、それぞれの保育者が未来を語り、互いの共通理解の薄さに気づく、共に保育する関係があったと考える。

3. まとめ

以上見てきたように、ビデオを使ったカンファレンスの参加者の関係性は、何をどのように撮るか、カンファレンスがどのようなことを話題にしていくのか、どの位の期間続いているのか、参加者が何を求めているのか、などによって異なると言える。

撮られる者が感じる根源的な圧力に配慮しつつも、撮る—撮られる、強者—弱者という二項対立の論議に止まってしまうのは不毛であると考えられる。

撮られる側の痛みだけでなく、撮る側にも痛みがあり、迷いがあり、関係を模索しつつカンファレンスに参加しているのである。そのような互いがその時々に関係性を探りながら、幼児を見る目、遊びを見る目、そして自分を見る目を育てていくような『動態』としての実践共同研究の意味を確認した。

また、特定のテーマ追求型や特定の幼児や学級、遊びを予め決めて撮影し、話し合っていく園内研究会の場合や、一年に1～2度の場合、それぞれ異なる関係性が生じているがこれはまた今後の課題としたい。